

平成19年 6月24日（日）

みなとまちづくり生涯学習講座
シリーズ うみ ふね みなと〔第2回〕

瀬戸内海をクルーズで世界の海へ—神戸港を瀬戸内海クルーズの母港に—

神戸経済同友会特別会員

上川 庄二郎氏

<プロフィール>

（社）神戸経済同友会特別会員。昭和10年生まれ。昭和35年に神戸大学法学部卒業後、神戸市神戸空港対策室長、消防局長などを歴任し、平成7年退職。退職後は大阪産業大学非常勤講師、関西学院大学非常勤講師を経て、現職にいたる。写真家、鉄道関係の著作者としても知られる。



神戸港を考えるに当たり、プロローグとして明石海峡大橋についてお話しさせていただきます。この橋は3代前の原口忠次郎神戸市長が、戦前からお持ちだった強い意志の下で造られました。原口元市長は、明石海峡大橋が完成すれば、四国に工業団地・工場が形成され、海外へ輸出する製品が製造さ

れる。その製品が橋を渡って貨物になり、神戸港から輸出される。そして、神戸港は非常に大きな発展をする。そういうお考えがあったようです。

しかし、賃金の高騰、労賃の高騰といった理由で、日本の生産基地はアジア、特に中

国の方へと移ってしまい、明石海峡大橋が架かっても大きな工業団地は結局四国には生まれませんでした。さらに、神戸港の中突堤から出ていた徳島、高松、淡路といった近海航路も橋が架かったことでなくなり、瀬戸内海の“みなと”はすっかり寂れてしまいました。今、瀬戸内海は残念な状態になっているのです。

神戸港は昭和53年には世界第3位の港でした。たとえ横浜港といえども10位以内にも入っていません。アメリカ大陸ではニューヨーク・ニュージャージー港、ヨーロッパではロッテルダム港、それからアジアでは神戸港。これらが世界の三大港だったのです。しかし、現在神戸港は第39位だそうです。これまでの神戸の地元経済や市民を支えてきましたが、今のままでは偉大なる産業遺産になりかねません。

その一方で、ポートピア'81の頃、第4突堤に客船バースが整備されました。ポートターミナルですが、ロケーションがあまり良くないのですね。きれいな船が入港しても見る場所がなく、市民の皆さんも足を向けない。例えば、「クイーンエリザベスⅡ」が神戸港に入港すると見に来られるのは3000人程度ですが、横浜港の場合は10万人も見に来るのです。神戸港と横浜港の市民の意識も違うのかもしれませんが、しかし、市民の意識が違うというのは、やはりロケーションの問題でもあるのではないかと思います。

そうした反省から、去年のお正月から中突堤を客船バースにして、今は「飛鳥Ⅱ」やいろんな外国の客船が着くようになりました。たくさんの市民の方々が身近にご覧になれるようになり、にぎやかになってきたなという印象を皆さんも感じていらっしゃるのではないのでしょうか。



そこで、わたしが提唱しておりますのは、神戸港の再興のために瀬戸内海クルーズの拠点にしようというものです。そして、神戸港をそのクルーズの母港にする。さらにこれを現在国土交通省が取り組んでいる外国人観光客を年間1000万人来てもらおうというビジット・ジャパン・キャンペーンの目玉にしたいと考えているのです。

観光について少しお話しさせていただきます。観光のタイプを分類しますと、見物して回る”sightseeing”、自分でスポーツやレクリエーションをする”doing”、それから滞在する”being”と3つに分けられますが、クルーズによる旅行はこのすべてをあわせ持っています。



船で長い間滞在するわけですから、当然”being”な観光です。よく言われるのは、船に長いこと乗るのは退屈でしょうということですが、全く退屈ではありません。周りが海という非日常性の高い空間であり、船はリゾ

ート感覚で過ごせる場所です。天気がいいと、水平線から太陽が上がってくるのを見ているだけでも乗る価値がありますよ。夜空の星を眺めるのもいいです。航海士は星の勉強をしていますから、夜になったらいろいろと教えてくれます。

さらに、普通の長期滞在の旅の場合、当然ある一定のエリアで過ごすわけです。それがクルージングの場合だと船が勝手に動いてくれますので、この”sightseeing”が自然と広がるわけです。クルーズは船から降りるとそこがもう“まち”、つまりホテルの玄関から出たら“まち”というように便利なものなのです。

それから、”doing”。南の島に行けばダイビングもできますし、シュノーケルでも50センチほどちょっと顔を沈めたらもう竜宮城ですよ。外国の船であればカジノもできる。ダンスの好きな人は毎晩踊り明かします。

それに加え、船内はすべてバリアフリーで高齢者の方にもおすすめできます。また、クルーズ旅行というと高い、贅沢と思われがちですが、そんなことはありません。確かに上質なものではありませんが、高価でまったく手が出ないというものでは決してないのです。

さて、そんな魅力の溢れる観光形態であるクルージングの中でも、今リバー・クルーズの人气が上がってきています。川というのは、内陸都市への物資の輸送路として発達し

てきました。ですから、両岸には歴史、文化の香りの高い古都や田園風景が広がっています。物資の輸送路としては船よりも陸路が発達して、大きな財産である運河にすぎがでてきました。そこでこれを、観光ルートとして使おうではないかと変わってきたわけです。ヨーロッパでは、ボルガ河・ドン河クルーズ、ドニエプル河クルーズ、ローヌ河・ソーヌ河クルーズ、ライン河クルーズ、セーヌ河クルーズなど、またオランダ・ベルギーの運河クルーズやロシアのモスクワ河、さらには中国の長江などでも取り組まれています。リバー・クルーズの眺めは、まさに動くパノラマです。



また、リバー・クルーズ船は100～150人乗りの小ぶりの船であるためにアットホームで、服装もそんなにうるさいことを言われません。それに、川ですので波もなく、皆さん心配されるであろう船酔いもないわけです。そういうわけで、バスを乗り継ぎ観光めぐりしていた人も、さらには大型船で大きな海をクルーズしていた人も、リバー・クルーズの方へ関心が向き始めているのです。

このリバー・クルーズを瀬戸内海で行おうというのがわたしの提言です。瀬戸内海は日本

のエーゲ海という人もいますが、それはまったく違います。瀬戸内海は瀬戸が「川」で灘が「湖」なのです。

左の地図をご覧ください。エーゲ海と瀬戸内海の地図を同じ縮尺にしてみました。地図の右上がエーゲ海です。一方、日本の瀬戸内海を見てください。同じ縮尺にしたら、瀬戸内海は世界のスケールでは海ではなく川なのです。



さて、瀬戸内海を川として捉えてみると、ヨーロッパの河に負けないほど、両岸に様々な歴史、文化が根付いていることがわかってきます。また、冒頭にお話しました明石海峡大橋は世界一の長大橋です。右の写真は瀬戸大橋です。この橋が、また瀬戸内海に新しい景観をつくり出しています。



四国の皆さんは、花や木を植えて島々をきれいにしようと一生懸命努力されています。そして、沿岸の姫路、宇野、高松といった“みなと”はみんなクルーズ船を一生懸命誘致しています。宿毛には岸壁ができ、今まで陸の孤島だったところをクルーズで開拓しようとしておられます。壱岐も岸壁ができ、今誘致に一生懸命です。

瀬戸内クルーズを毎週定期的に行うと、行くところがなくなるとおっしゃる人がいますが、決してそうではありません。「瀬戸内・海的路ネットワーク推進協議会」に加盟している107の市町村みんなが、「うちに来てくれ」と言っているんです。それぞれのまちには、四季折々の姿があり、四季折々の行事があります。もう行くところがなくなるといふようなことにはなりません。すべての歴史遺産を見聞するとしたら、おそらく一生かかっても見聞ききれないほどのものになると思います。

瀬戸内海は世界にもっと誇れるものだと思います。21世紀は観光の世紀だと言われています。瀬戸内海は天然のいけすといわれているように豊穡の海です。歴史もある、文化もある。少し写真をご覧ください。緑川洋一という写真家の作品です。こんなすばらしい瀬戸内の写真を残していちゃいます。こうした観光的価値の高い瀬戸内海を今一度見直し、アピールしていけば、商品価値の高いクルーズが絶対につくれるはずです。そして、瀬戸内海に行くには、小ぶりの船がちょうどいいわけです。だから、瀬戸内海でリバー・クルーズを実現させたいのです。



そして、このクルーズがなぜビジット・ジャパン・キャンペーンの目玉になるか。そもそも、瀬戸内海というのは明治時代にシーボルトが残した著書の中で「The Inland Sea」という言葉があり、この訳語から瀬戸内海という言葉ができたそうですが、その頃に外国の方々が瀬戸内海を高く評価したのです。

岩倉具視が欧米視察に出かけたときには、外国の方々から「瀬戸内海は世界第一の景だ」と言われて帰ってくる。彼らの表現を使うと、「宝石のように輝く海、砂浜の金色の輝き、薄霞のベールで覆われた山々」と評価された。それから、近代ツーリズムの生みの親と言われているトマス・クック、この人も瀬戸内海を「ヨーロッパのどの湖よりもすばらしく、これらのいいところを集めて一つにしたほど美しい」と表現しているのです。

現在でも外国の方々は、瀬戸内海を大きく評価してくれています。ここで、「スピリッツ・オブ・オセアヌス」を運航しているクルーズ・ウエストというシアトルの会社の旅行パンフレットをご紹介します。アメリカの方々に瀬戸内海への旅行を募集しているパンフレットです。瀬戸内海の風景を彼らは次のように紹介しています。

「目をみはるように美しい瀬戸内海。歴史遺産が豊富でゆったりとしたクルーズが楽しめる内海」、「ここを、スピリッツ・オブ・オセアヌスの居心地のよいキャビンやラウンジでゆっくり寛ぎながら、日本の素晴らしい景観に見入ってください」、「瀬戸内海のような入り組んだ島々をめぐるのに最適なのが、この小ぶりのスピリッツ・オブ・オセアヌスなのです」と。また、「寄港地では静かに佇むお寺や庭園を觀賞しながら茶の湯を嗜み、お城や城下町を觀賞してください。宮島では、伝統的な雅楽の装束に目を奪われるでしょう」と。

そして、「日本は、西欧の国々とは異なった歴史、文化を持つ美しい国です」、「寿司を初め日本食や日本酒も嗜んでみてください」、「きっと好奇心を煽るような日本文化に接することができます」。



外国の方々がこんなふうに瀬戸内海を評価してくれているんです。そして、船に乗らなければこんな景色は見られない。瀬戸内海をやはり我々は見直していかなければいけないと思うのです。

観光が、瀬戸内海を売り込む大事な視点になるということを申し上げてきました。では、その中で神戸はどうなっていけばよいのか。

オランダを例に挙げますと、アムステルダム港がクルーズの母港になっています。皆さんアムステルダムに来てリバー・クルーズに向かうのです。また、ロシアからサンクトペテルブルグのリバー・クルーズではまず、モスクワに来るのです。ですから、世界の人々が瀬戸内海クルーズといたら、まず神戸へと、神戸港が瀬戸内海の玄関になることが肝心です。

しかし、外国人が関西へ来ると、京都・奈良で終わりにになってしまうのが現状なのです。瀬戸内海に来るにも、大阪港や下関港もあります。もともと、神戸は開港以来欧米型のまちづくりをしてきましたから、欧米の方々に神戸に興味を持ってもらい、神戸に呼ぶのは難しいと正直なところ思っています。

先ほどご紹介したパンフレットでも、実は表紙は金閣寺なのです。関空へ来て神戸港へ来るまでの間に、奈良、京都のオプションツアーというのを付けています。それで金閣寺が載っているんです。そして、神戸へ来たら船に乗る前に姫路城を紹介しています。姫路城あるいは京都、奈良のような外国人が喜んでくれるような日本的で世界遺産に相当するようなものが神戸にあるのかと言われるとなかなか難しい。

しかし、神戸港が、モスクワあるいはアムステルダムのような地位を保っていけば、必ずや世界に誇る神戸港が瀬戸内海クルーズの母港になるとわたしは思っています。神戸は世界に冠たる港です。まだ世界から忘れ去られてはいないのです。



また、神戸のまち、そして人がやってくる船に対して歓迎を行うことが大切です。一生懸命歓迎をすれば、船に乗っている人たちは部屋から手を振って喜んでくれるわけです。高松港では、平家踊りで一生懸命地元の皆さんが歓迎します。先日行われた神戸港の歓迎式典では、琴と太鼓の演奏、矢田市長からは船長にお土産が渡されるといったものでした。こうした取組みはとても大切で、市民の皆さんにも、ぜひ歓迎行事に参加していただきたい。ですから、市民の皆さんがこういう歓迎をする場に参加する仕組みをつくるべきだというのが、私の考えなのです。

それから、もう一つ大事ななお土産です。かつて神戸には真珠がありました。日本は世界の真珠の8割を占めていて真珠の国と言われていたのです。その日本のさらに8割

を神戸が持っていた。つまり、世界で言うと64%、3分の2は神戸が世界のシェアを占めていたのです。しかし、10年ほど前を境に、世界一ではなくなり、真珠も現在厳しい状況です。しかし、観光にとってお土産というのは大変大事なことだと思いますので、みんなで知恵を絞っていききたいものです。

(盛山議員の話)



クルーズが日本で定着するために、何が
必要か少しお話しさせていただきます。

クルーズの定着に大きな歯止めをかけて
いるのは、一般の方が、なかなかまとまっ
た休みをとりづらいということだと思います。
有給休暇は年に20日間、普通皆さんお
持ちだろうと思うのですけれども、事前に
予定を組んで、ここからここまで1週間範

囲、場合によっては1カ月休むことができる人は、例外でしょう。

また、日本の周りの海というのはなかなか気象、海象条件の厳しいところが多いものですから、クルーズ・マーケットの中心になりがたい。日本の船会社が外国に船をつくり、そこでクルーズを行うことはあっても、日本近海では行わないですから、やはりクルーズのマーケットとして条件的に難しいところがあるのではないのでしょうか。

しかし、瀬戸内海は、世界の中でもこれほど恵まれた自然はないというほどに大変美しい海です。この美しさは、当たり前なものだと思われている方も多かもしれませんが、世界には赤茶けた岩肌がむき出しのところが多いのです。瀬戸内海は本当にきれいな多島海で、小さな島影をゆっくり船で越すと、また次の緑のきれいな島で、こういう海というのはなかなかないと思うんですね。

クルーズのマーケットとして、一番定着しているのがカリブ海だろうと思います。カリブ海では、ニューヨークあるいはフロリダから、短ければ3日、普通は1週間単位でどこかに行って戻ってくる。1週間単位で1人20万円ぐらいのパッケージツアー、例えば日本からどこか外国へ行かれると、そういうものの選択肢の中の一つとして選べるような形になっているのです。そうしたパッケージを日本近海で提供することができるようになれば、クルーズが定着するかと思います。

わたしもずっと運輸省におりましたので、船には関心があります。クルーズにも2回ほど参加しました。上川さんの瀬戸内海クルーズがうまく進むよう、お手伝いさせていただこうと考えております。

神戸経済同友会も現在一生懸命、瀬戸内海クルーズ実現に向けて取り組んでおります。2007年3月、「神戸港を『瀬戸内海クルーズの母港』に、そして世界を代表する『交流のみなと』に」と題する提言を行いました。そして、来年の海の日前後に「ばしふいっくびいなす」で2泊3日「せとうち・感動体験クルーズ」をやろうと考えています。恐らく年末か年明けぐらいには詳細が公表されると思いますので、ぜひ本日お越しになられている皆さんにご参加いただき、盛り上げてほしいと思います。神戸市も「国際海事都市神戸」再生のための取り組みということで、瀬戸内クルーズを検討することになっています。

ぜひ国土交通省の皆さん、あるいは盛山先生、そして本日参加していただいております皆様にお力添えをいただいて、定員100～200人程度で毎週2回を目処にし、神戸港を母港にした瀬戸内海クルーズの定期船が運航できるような日が一日も早く来るのを待ちながら、きょうのお話を終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

